

2017 いきいきシニア初春のつどい

畑 正憲さん 講演会

ムツゴロウさん
in宮城

人間も動物も触れ合いが大切

「ムツゴロウ」の愛称で親しまれている作家・生物学者の畑正憲さんが1月19日に来仙し、「2017いきいきシニア初春のつどい」（主催／宮城県社会福祉協議会・いきいきSUNクラブ）で講演。「命に恋して」と題し、動物とともに歩んできた人生経験から、人間や動物の命の大切さについて熱く語った。（7面に関連記事）



動物との暮らしから得たものを語る畑さん

かまれて距離縮まる

クマの子を一頭欲しいと思ひ、知人にヒグマを譲ってもらいました。ヒグマは親にくっついて乳を飲んでいるうち、僕は敵なんです。だから僕はヒグマにかまれました。「好きなようにかめ、かまならかめ」と、ヒグマにかませました。

ある日、風呂に入るのに自分の体を見てみたら、700個ぐらいの穴があるんです。ヒグマにかまれた穴。風呂に入ると染みるんです。タオルを体に巻いて、エジプトのミイラみたいになって風呂に入りました。

命と命は 結び付いている

ヒグマが僕をかむのはどうしてなのかと思ひました。これは動物同士が仲良くなるため。ヒグマが猫を育てたという例もある。命と命はどこかで結び付くようになってくるんです。

動物と動物が仲良くするのはなぜなのか。「オキシトシン」という物質が関係しているようです。オキシトシンは人間を含む動物の心を柔らかくします。

人間の子供はお母さんにしっかりとくっついていきますね。犬も猫も同じです。子供と親は1対1です。子供と親は1対1です。子供は誰かが近

つくと、敵を見るような目をしてお母さんにしがみついたり。そういう時期なんです。哺乳動物の子供はお母さんに乳をもらって結び付きが強く

なり、お母さん以外は受け入れられなくなります。鹿もそうですよ。僕は鹿を飼っていましたが、ある日子供が産まれました。鹿の子は目がくりくりしてかわいかったです。僕はなんとか仲良くなる方法はないものだろうか、と、そいつと鹿に近づいていきました。産まれたばかりの鹿は、まだお母さんと1対1で結び付いていないんですね。

山にいたある人が「鹿の子を見つけただけど、元気がなくて1匹でいるから拾ってきた」と言っています。これは大間違い。子鹿は歩けるようになるまで、じっとしているんです。親が餌を取りに行つて、乳をいっばいやつて、子鹿は大きくなるんですよ。

子鹿はやがて立ち、歩

講演開始前、畑さんの登壇を待ちわびる観客



き、跳ぶ練習をするんです。足が丈夫になると、親と一緒に出掛けられるようになる。この時期に、親と子鹿は結び付きません。それ以前の子鹿と親の結

び付きは、それほど強くない。ですから、人間の僕が子鹿に近づいても全然平気でした。

「嫌」の気持ち伝わる

馬と猫だつて、本当に親しくなれます。ちゃんとした仕組みがあつて、動物と人間は一緒に暮らせないといいことはあり



約1時間半、背筋を伸ばして講演した

ません。人間が動物を恐れたり、自分の体を傷つけられたりするのが嫌だという気持ちがあると、それが全部動物に伝わって、なかなかうまくいかないんですね。

戦後のスウェーデンに、非常に荒れている学校がありました。そこで、生徒にこう伝えました。「あいさつの際は握手をする、できたらハグをしろ、なさい」と。そうしたら、荒れていた学校が、素晴らしい学校に変わりました。人と人が触れ合うことで、オキシトシンが出るんです。お互いに仲良くしていかないと、という気持ちが自然と生まれるんです。

今の時代、誰かの体に触れる機会が少なくなっています。お母さんが子供に触れることも（減っている）。オランウータンやチンパンジーの子供は、お母さんを離さない。こういった触れる行為は、人間の命にとっても大切なこと。最近、それがだんだん薄れているのではないのでしょうか。

中国で行われた一人つ子政策。あれは僕、本当に情けないと思ひました。子供は上や下にきょうだいがいたり、近くの人と抱き合ったりして、オキシトシンを含めいろいろなものを体から出します。オキシトシンは仲良く生きていく上で大切なもの。オキシトシンについては話し始めると切りがないので、この辺りでおしまいにさせていただきます。どうもありがとうございました。